

日本気象学会 2013 年度秋季大会 企業展示機関一覧

今大会の開催期間中，以下の各機関による展示が行われます(2013 年 9 月 24 日現在；50 音順)．

英弘精機株式会社

HPCシステムズ株式会社

株式会社プリード

三菱電機特機システム株式会社

明星電気株式会社

日本気象学会 2013 年度秋季大会

会期：2013 年 11 月 19 日（火）～21 日（木）

会場：仙台国際センター（仙台市青葉区青葉山） <http://www.sira.or.jp/icenter/>

大会実行委員会担当機関：仙台管区气象台，東北大学大学院理学研究科，（一財）日本気象協会東北支局

大会委員長：牧原康隆（仙台管区気象台長）

当日の会場への連絡先：大会実行委員会事務局（仙台国際センター小会議室4）

TEL : 090-9687-8837 (大会期間中のみ有効)

取り次ぎ等はいたしませんのでご了承ください.

仙台国際センター（代表 TEL：022-265-2211）

交通の案内

- (1) 仙台空港からJR仙台駅まで

JR：仙台空港アクセス鉄道（料金630円，平均24分）

- (2) JR仙台駅から会場（仙台国際センター）まで

バス：乗車／仙台駅前（西口バスプール9番乗場）

路線名／710「宮教大・青葉台」，713「宮教大・成田山」，715「宮教大」，719「動物公園循環（青葉通・工学部經由）」，720「交通公園・川内営業所」

降車／博物館・国際センター前（料金180円，バス移動約10分，徒歩1分）

タクシー：JR仙台駅から約7分（1000円程度）

徒歩：JR 仙台駅から約 30 分（約 2km）

会場案内図



大会行事予定

A 会場 : 大会議室「橘」 (2 階) シンポジウム・授賞式会場: 大ホール (2 階)
 B 会場 : 大会議室「萩」 (2 階)
 C 会場 : 展示・レセプションホール「桜 2」 (2 階) 受付 : 2 階ロビー (2 階)
 D 会場 : 中会議室「白樺 1」 (3 階) 大会事務局: 小会議室 4 (2 階)
 ポスター会場: 展示・レセプションホール「桜 1」 (2 階) 懇親会 : 展示・レセプションホール「桜 1」 (2 階)
 () は講演数, - は座長

		A 会場	B 会場	C 会場	D 会場
11 月 19 日 (火)	09:45～ 12:30	気候システム I (17, A101～A117) －釜堀弘隆－ －川瀬宏明－	竜巻・雷 (19, B101～B119) －横田 祥－ －新井健一郎－	物質循環 I (13, C101～C113) －田中泰宙－	大気力学 (9, D101～D109) －伊賀啓太－ 大気境界層 (9, D110～D118) －菅原広史－
	13:30～ 17:00	スペシャル・セッション 「全球降水観測計画 「GPM」主衛星打上げ と新たな降水観測」 (16, A151～A166) －可知美佐子－ －広瀬正史－	スペシャル・セッション 「航空機観測による大 気科学・気候システム 研究」 (12, B151～B162) －青木周司－ －佐藤正樹－	スペシャル・セッション 「中緯度海洋前線近傍 の大気海洋現象」 (17, C151～C167) －飯塚 聡－ －万田敦昌－	熱帯大気 (12, D151～D162) －横井 覚－ 台風 (13, D163～D175) －伊藤耕介－
	17:00～ 18:00	ポスター・セッション (104, P101～P1a4)			
11 月 20 日 (水)	09:15～ 12:00	気候システム II (18, A201～A218) －早崎将光－ －青柳曉典－	降水システム I (19, B201～B219) －真木雅之－ －牛山朋来－	物質循環 II (14, C201～C214) －安成哲平－	観測手法 (17, D201～D217) －山本真之－
	13:00～ 13:50	山本正野論文賞・堀内賞・奨励賞授与			
	13:50～ 15:20	山本正野論文賞・堀内賞受賞記念講演			
	15:30～ 17:45	シンポジウム「二酸化炭素研究の新展開」 司会: 青木周司 基調講演: 森本真司, 川村賢二, 横田達也, 真木貴史, 伊藤昭彦			
	18:00～ 20:00	懇親会			
11 月 21 日 (木)	09:15～ 11:30	データ同化・気象予報 (15, A301～A315) －黒田 徹－	降水システム II (15, B301～B315) －前島康光－ －中井専人－	スペシャル・セッション 「気象情報の活用およ び気象予報士にでき ること」 (6, C301～C306) －岡留健二－ 気象教育 (7, C307～C313) －筆保弘徳－	中高緯度大気・相互作用 (10, D301～D310) －森岡優志－
	11:30～ 12:30	ポスター・セッション (104, P301～P3a4)			
	13:30～ 17:00	スペシャル・セッション 「雲エアロゾル放射観測 衛星「EarthCARE」の 打ち上げに向けて」 (18, A351～A368) －岡本 創－ －藤吉康志－	スペシャル・セッション 「近年における日本の 冬の気象: 気候変動, 遠隔応答の枠組みか らの理解」 (14, B351～B364) －本田明治－ －猪上 淳－ －高谷康太郎－	スペシャル・セッション 「大気-陸面間の水・エネ ルギー・炭素フラック スに関する最新研究 2013」 (18, C351～C368) －吉田龍平－ －佐々井崇博－ －小谷亜由美－	中層大気 (13, D351～D363) －黒田友二－ 大気放射 (11, D364～D374) －石元裕史－

発表件数: 540 件 (口頭発表 332, ポスター 208)

口頭発表の講演・質疑時間: 6 分と 2 分

当大会予稿集に掲載された研究発表の文章・図表を複製あるいは翻訳して利用する場合には, 日本気象学会の文書による利用許諾を得た上で出所明示して利用しなければなりません. ただし著作権者自身による利用の場合は, 利用許諾の申請は不要です.

本プログラムの記載内容に関する問い合わせは, 〒305-0052 茨城県つくば市長峰 1-1 気象研究所予報研究部内 講演企画委員会 (e-mail: kouenkikaku2013a@metsoe.or.jp) まで.

大会参加費・懇親会費

大会参加費

- 大会参加費は以下の表の通りです。

大会参加費		
種別	前納	当日
講演者 A	8,000 円	—
講演者 B	5,000 円	—
聴講者	3,000 円	4,000 円

- 講演者の種別：

講演者 A：研究機関・大学に所属する講演者（ただし、学部生・院生は除く）

講演者 B：講演者 A に該当しない講演者

- 講演件数が 2 件の場合も大会参加費は変わりません（講演件数による加算はありません）。
- シンポジウムのみに参加する場合は、参加費は無料です。

懇親会費

- 懇親会費は以下の表の通りです。

懇親会費		
種別	前納	当日
一般	4,000 円	5,000 円
学生	2,000 円	3,000 円

支払方法

- 講演者の参加費の支払い方法は前納のみとなっており、既に受付は締め切られています。
- 懇親会費及び聴講者の参加費を前納する場合は、大会ホームページにて 2013 年 9 月 17 日（火）までにお支払下さい（郵便振替の場合は 2013 年 9 月 10 日（火）まで）。それを過ぎた場合は当日払いとなります。

領収書

- 領収書は参加者本人の名義で、大会当日受付にて名札と一緒に手渡される予定です。
- 名義の変更が必要な場合には再発行が可能ですので、大会当日受付にてお申し出下さい。

その他

- 一旦支払われた参加費・懇親会費は返却いたしません。
- 参加費・懇親会費には会員・非会員の区別はありません。
- 非会員の方も規定の参加費・懇親会費をお支払い頂ければ大会・懇親会に会員と同様に参加することができます。

講演の方法

口頭発表（スペシャル・セッションを含む）

- 一般口頭発表の講演 1 件あたりの持ち時間は 8 分（講演 6 分・質疑 2 分）です。
- スペシャル・セッションの発表時間については世話人からの指示に従ってください。
- 講演には PC プロジェクターを使用できます。
- 講演にあたり、予め以下の点をご了承ください。
 - ✓ パソコンは各自で準備して下さい。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備します。
 - ✓ セッション開始前の休憩時間などを利用して、必ず接続の確認を行っておいて下さい。また接続が不安な場合は、セッション開始前に会場係に申し出て下さい。
 - ✓ 突然の故障や接続の際のトラブルが発生した場合、座長の判断で発表順の繰り下げなどの対応をとることがあります。携帯用メディアによるバックアップファイルの準備など、トラブルへの備えは講演者自身で行って頂くようにお願いします。

ポスター発表

- 講演者はポスターに表題と著者名を明記して下さい。
- ポスター発表の一人当たり使用可能面積は、縦 180 cm × 横 120 cm 程度となっています。
- ポスターの掲示には画鋏・ピンが使用できますが、テープ類は使用できません。これらは発表者自身で準備してください。
- ポスターの掲示可能時間は以下の通りです。会場の都合上時間厳守でお願いします。
 - ✓ 第 1 日の発表者は 11 月 19 日 13:00～18:00
 - ✓ 第 3 日の発表者は 11 月 21 日 09:00～13:00
- ポスター会場での機器の使用は、講演申し込み時に申し出ていたもの以外は原則として認められません。

保育施設の紹介について

大会実行委員会では、大会期間中の保育施設として、次の施設を紹介します。

「ワールド・キッズ保育園」

住所：仙台市青葉区大町2丁目11-12

（仙台国際センターから徒歩10～15分）

TEL：022-265-1722

施設を利用される場合は、利用日の前日17時までに利用者

が直接お申し込みください。

また、保育施設利用料の一部補助を行う予定です。上記の施設以外の保育施設を利用される方もこの対象になります。いずれかの施設を利用される方は下記までご連絡ください。

連絡先：折笠 成宏（仙台管区气象台）

TEL：022-297-8160, FAX：022-297-5615

E-mail：norikasa@met.kishou.go.jp

シンポジウム「二酸化炭素研究の新展開」

日時：大会第2日（11月20日〔水〕） 15:30～17:45

会場：仙台国際センター 大ホール

司会：青木周司（東北大学）

※シンポジウムの聴講は無料です。一般の方も参加できます。

趣旨

二酸化炭素（CO₂）は最も重要な温室効果気体であり、その大気濃度は、産業革命以降、急激に増加し続けてきました。このような濃度増加は、主に化石燃料消費や森林破壊などの人間活動によるものであり、今後もこの傾向は続くと考えられます。しかし、どこからどれだけのCO₂が放出され、それが大気中をどのように輸送され、どこにどれだけ吸収され、結果として大気にいくらか残るか、といった地球規模の循環について正確な理解が得られているわけではありません。一方、CO₂濃度増加率の年々変動に着目すると、エルニーニョ現象や大規模な火山噴火と良い相関があることが見出されており、これらの現象によって引き起こされる気候変化が、地球規模のCO₂循環に影響を与えるためだと考えられています。また、人間活動の影響が無かった遠い過去には、氷期・間氷期といった大規模な気候変動に同期して大気中のCO₂濃度が大きく変化していたことが、氷床コア研究によって明らかにされています。このように、大気中のCO₂濃度は、人為的な要因と自然的な要因が複合して複雑な変動を示します。地球温暖化が顕在化しつつある今日において、地球規模のCO₂循環を明らかにし、人間活動による今後の大気CO₂濃度の推移を予測することが非常に重要な課題になっています。この課題を解決するために学際的な研究が広く展開されており、新たな成果が得られつつあります。今回のシンポジウムでは、CO₂研究の最先端を紹介し、今後の展望について議論します。

基調講演

「大気観測に基づく地球規模炭素循環の研究」
「氷床コア分析による過去のCO₂の復元」
「GOSAT および GOSAT-2 による CO₂ 観測」
「データ同化と大気輸送モデル」
「生物圏の炭素循環モデリング」

森本真司（東北大学）
川村賢二（国立極地研究所）
横田達也（国立環境研究所）
眞木貴史（気象庁気象研究所）
伊藤昭彦（国立環境研究所）

総合討論

スペシャル・セッションの概要紹介

全球降水観測計画「GPM」主衛星打上げと新たな降水観測

日時：大会第1日（11月19日）13:30～17:00

場所：A 会場

趣旨：全球降水観測計画「GPM（Global Precipitation Measurements）」は、日米（JAXA/NASA）を中心とした各国宇宙機関の協力で進められている。日米共同開発のGPM主衛星は、2014年初めの種子島宇宙センターからの打上げを控え、現在米国NASA/GSFCにおいて組み立てと試験を実施中である。本衛星にはJAXAと情報通信研究機構が開発した二周波降水レーダ（DPR）が搭載される。熱帯降雨観測衛星TRMM搭載のレーダと同様のKu帯に固体降水にも感度を持つKa帯を加えて、北緯65度から南緯65度までの降水の3次元観測を可能にする。GPMは、このDPR観測を核に、マイクロ波放射計搭載のコンステレーション衛星（GCOM-W1を含む）が連携し、ほぼ全球の降水を高頻度高精度で測定する計画である。本セッションでは、間近に迫るGPM主衛星の打上げにより期待される新たな降水観測について議論し、より多くの気象研究お

よび応用研究への有効利用を促進することを目的とする。
世話人：沖理子（宇宙航空研究開発機構）、高藪縁（東京大学大気海洋研究所）、中村健治（獨協大学）、井口俊夫（情報通信研究機構）、牛尾知雄（大阪大学）

航空機観測による大気科学・気候システム研究

日時：大会第1日（11月19日）13:30～17:00

場所：B 会場

趣旨：地球温暖化を含む地球環境問題に対応するには、地上や人工衛星からの観測に加えて航空機を用いた地球観測システムの構築と、そのための広い分野の研究者が長期的な視点から利用できる航空機の運用体制を確立することが必要である。先端的な計測器を用いた航空機による直接観測は対流圏全域を観測可能であるとともに、測定項目、精度、時空間分解能の点で優れている。本セッションでは地球観測専用の航空機の保有・占有と、それを用いた地球観測・監視システムの構築へ向けての展望を議論することを目的とする。航空機観測により成果が期待される重要課題としては、温室効果気体の変動と循環、エアロゾル・雲・

降水相互作用、越境大気汚染、台風・集中豪雨・メソ降水システムの解明などなどがある。また雪氷・海水の動態解明や陸域・沿岸・海洋生態系観測など多くの課題への応用も期待される。これら多様な課題において、これまでの航空機観測の研究成果や観測専用機導入後の研究計画などについての発表を期待する。

世話人：小池真（東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻）、新野宏（東京大学大気海洋研究所）、近藤豊（東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻）、佐藤正樹（東京大学大気海洋研究所）、青木周司（東北大学大学院理学研究科付属 大気海洋変動観測研究センター）、篠田太郎（名古屋大学地球水循環研究センター）

中緯度海洋前線近傍の大気海洋現象

日時：大会第1日（11月19日）13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：黒潮に代表される西岸境界流が運ぶ膨大な熱や縁辺海での海陸分布などにより、中緯度海域には温度コントラストが顕著な海洋前線が形成される。近年の人工衛星、データ解析、高分解能数値モデルによる実験などから、海洋前線は低気圧の急速な発達や下層雲の形成、梅雨期の降水システム、さらに海盆スケールの気候形成など様々な時間・空間スケールの大気現象に対して影響を与えていることが明らかになりつつある。また、最近の研究において顕著な水温上昇のシグナルが中緯度海洋前線周辺で見られることが報告されており、温暖化時の極端気象の予測を考える上でも、これまであまり関心が払われてこなかった中緯度大気現象に果たす海洋の役割についての知識を再構築する必要がある。このセッションでは、観測研究、データ解析、数値実験などの手法に基づいた中緯度海洋前線近傍で起こる様々な大気並びに海洋現象の話題を提供して頂き、中緯度における大気と海洋との関係について季節性や地域性の観点も踏まえ理解を深めたい。台風の温低化や海陸風などの話題提供も歓迎する。予備的な研究報告や観測速報、大学院生などの若手の発表も歓迎する。

世話人：吉岡真由美（東北大学大学院理学研究科 大気海洋変動観測研究センター）、茂木耕作（独立行政法人 海洋研究開発機構 地球環境変動領域）、川合義美（独立行政法人 海洋研究開発機構 地球環境変動領域）、美山透（独立行政法人 海洋研究開発機構 地球環境変動領域）、飯塚聡（独立行政法人 防災科学技術研究所 観測・予測研究領域 水・土砂防災研究ユニット）、万田敦昌（長崎大学 大学院水産・環境科学総合研究科）、川村隆一（九州大学 大学院理学研究院 地球惑星科学部門）、中村尚（東京大学 先端科学技術研究センター 気候変動科学分野）

気象情報の活用および気象予報士にできること

日時：大会第3日（11月21日）09:15～10:15

場所：C会場

趣旨：気象技術の進展により、気象情報が質・量ともに急速に充実してきました。情報はきめ細かくなり、確率表現や映像等によりわかりやすく使いやすくなりました。しかし、突風・豪雨等の極端現象には予測困難なものもあるので、気象情報をユーザー自らが取得し、内容を理解して判断することも求められます。気象予報士は、気象予報

を作成するだけではなく、報道等を通じて気象情報を解説していることはよく知られています。また、民間気象情報会社により、天候に左右される企業へのサポート等が行われています。さらに、防災関係者や一般住民を対象とする講演会で気象予報士が講師をつとめる等、知識の普及・啓発に貢献しています。最新の技術を防災や産業の発展等に活用するために、橋渡し役として気象予報士は何をすればよいのでしょうか。昨年に続き、気象情報の作成・伝達、関連知識の普及等に関わる研究成果の発表とともに、気象予報士にできることを考えます。

世話人：岩田修（日本気象予報士会）、杉山公利（日本気象予報士会）、金村直俊（日本気象予報士会）、弘中秀治（日本気象予報士会）、難波良彰（日本気象予報士会）、白石晶二（日本気象予報士会）、與語基宏（日本気象予報士会）、岡留健二（日本気象予報士会）

雲エアロゾル放射観測衛星「EarthCARE」の打ち上げに向けて

日時：大会第3日（11月21日）13:30～17:00

場所：A会場

趣旨：日欧協力のもと雲レーダやライダーと光学センサーで全球の雲・エアロゾル・放射を観測する衛星計画「EarthCARE (Earth Clouds, Aerosols and Radiation Explorer)」は開発試験フェーズを終えて、いよいよフライトモデル製作に着手しようとしている。ドップラ観測機能を持つ雲レーダやミー散乱とレイリー散乱を分離できる高スペクトル分解ライダーなど新規のセンサーが開発され、そのデータ処理アルゴリズム開発が日欧の研究者で進められている。また、地上から雲やエアロゾルを観測して衛星の観測精度を確かめる地上検証計画も本格的な検討を開始したところである。本セッションでは、EarthCARE衛星搭載センサーの開発状況を報告するとともに、アルゴリズム開発と地上検証の状況と課題、そして利用研究事例などを紹介して、より多くの気象研究者に本衛星計画に対する興味を喚起したい。

世話人：大野裕一（情報通信研究機構）、沖理子（宇宙航空研究開発機構）、岡本創（九州大学）、中島孝（東海大学）、藤吉康志（北海道大学）

近年における日本の冬の気象：気候変動、遠隔応答の枠組みからの理解

日時：大会第3日（11月21日）13:30～17:00

場所：B会場

趣旨：近年の夏の北極海の海水面積の急速な減少やグリーンランド氷床表面の融解は、北極温暖化増幅として地球温暖化に同期した現象としてとらえることが出来る。一方、最近における日本の冬の特徴をみると、2005/06年におよそ20年振りと言われた寒冬・豪雪を記録した後も昨冬（2012/13年）を含めて繰り返し低温と大雪が観測されている。昨冬は後半(3月)に記録的な高温偏差となったが、このような冬季における振幅の増加も特徴的である。これまで、日本の冬の寒暖に対しては、熱帯エルニーニョ、北極振動との関連性が着目されてきたが、それ以外の日本ひいては中緯度全体に対する大気の遠隔応答を総合的に考察する必要がある。このセッションでは、最近の日本の冬

の特徴付けを行い、さらに北極域変動、熱帯域変動、10年規模変動などとの関連を議論するために、最近の日本の冬に関わる研究発表を広く募集する。

世話人：猪上淳（国立極地研究所）、浮田甚郎（新潟大学）、高谷康太郎（JAMSTEC）、野沢徹（岡山大学）、平沢尚彦（国立極地研究所）、堀正岳（JAMSTEC）、本田明治（新潟大学）

大気-陸面間の水・エネルギー・炭素フラックスに関する最新研究 2013

日時：大会第3日（11月21日）13:30～17:00

場所：C会場

趣旨：陸域の水、熱、炭素循環（以下、WEC 循環）は、大気循環をコントロールする重要な素過程である。WEC 循環の研究では、気象・気候学や生態学、林学など、様々な視

点から数多くの研究成果が挙げられてきた。しかし、時空間スケールや対象領域、手法（地上観測、リモートセンシング、モデル）が多岐に渡る分野横断型の研究であるため、WEC 循環に直接関わる異分野の研究者が一同に会する機会は少なく、情報共有が必ずしも十分に進んでいないのが現状であった。そこで、本分科会では、WEC 循環に関する情報共有、及び包括的な理解による新たな課題の創出を目的として、手法や時空間スケール、対象地域ができるだけ異なる若手研究者を中心に講演頂く予定である。極域から熱帯まで、それぞれの研究フィールドでの最新の科学的知見を基に、大気-陸面間の WEC 循環の研究動向や今後の方向性について情報交換を行いたい。

世話人：吉田龍平（東北大院理）、佐々井崇博（名大院環境）

研究会のお知らせ

大会期間中とその前後に以下の研究会が予定されています。興味のある方はご自由にご参加下さい。

第40回メソ気象研究会

日時：2013年11月18日（月）（大会前日）13:30～17:00

場所：東北大学百周年記念会館 川内萩ホール会議室

（〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内40）

テーマ：「静かなるメソ気象 ヤマセ・霧・層雲」

コンビーナー：吉岡 真由美（東北大学大学院理学研究科 大気海洋変動観測研究センター）

内容：激しい降水や強風を伴うメソスケール気象現象は、人々の関心を引き、注目されがちです。しかし、メソ気象現象は一時的で激しいものだけではなく、霧や薄い雲、それらを伴う現象もあります。これまでメソ気象研究会では、集中豪雨や台風に代表されるような激しい降水を伴う現象をテーマとして多く取り上げてきましたが、今回は霧や層雲を中心とした比較的静かで持続し、おだやかな雨を伴う現象を取り上げます。気象現象としての霧や層雲の動態、その雲の中に存在する水や氷の粒子、その雲物理に注目します。薄い雲やその持続、もたらされる降水により、気候に与える影響についての話題、これらの現象をとらえるさまざまな観測・解析手法、その現状についても話題提供して頂きます。多くの方々の参加と活発な議論をお願いいたします。

プログラム：

13:30～13:35 趣旨説明

13:35～14:05 監視カメラでとらえた海霧・山霧の動態

藤吉康志（北海道大学低温科学研究所）

14:05～14:35 陸上のヤマセの観測

児玉安正（弘前大学大学院理工学研究科）

14:35～15:05 航空機観測による下層雲のエアロゾル-雲相互作用研究

小池真（東京大学大学院理学系研究科）

休憩

15:20～15:50 降水の統計と長期変動ー弱い降水を中心としてー

藤部文昭（気象研究所）

15:50～16:20 下層雲の形成・維持・消滅過程における放射の役割

早坂忠裕（東北大学大学院理学研究科 大気海洋変動観測研究センター）

16:20～17:00 総合討論

世話人：坪木和久（名大地球水循環）、加藤輝之（気象庁気象研）、小倉義光（東大大気海洋研）

連絡先：吉岡 真由美（東北大学大学院理学研究科 大気海洋変動観測研究センター）

E-mail: yoshioka@caos-a.geophys.tohoku.ac.jp

2013年7・8月豪雨災害に関する研究会

日時：2013年11月18日（月）（秋季大会前日）17:30～19:30
（メソ気象研究会終了後）

場所：東北大学百周年記念会館 川内萩ホール会議室

（〒980-8576 仙台市青葉区川内40）

共催：気象災害委員会、メソ気象研究会

プログラム：

17:30～17:35 趣旨説明（気象災害委員会）

17:35～18:00 「2013年8月9日の秋田・岩手豪雨の環境場と気象台の対応」

廣川康隆・吉田薫（仙台管区気象台予報課）

18:00～18:25 「2013年7月28日山口・島根県豪雨での現地の被害状況の概要」

田中健路（広島工業大学）

18:25～18:50 「山口・島根豪雨と2013年7～8月に大雨をもたらした大気状態の特徴」

加藤輝之（気象研究所）

18:50～19:30 総合討論

コメント(18:50～19:05)

① 「2013年山口島根大雨・秋田岩手大雨と近年の豪雨事例の比較」：石原正仁（京都大学極端気象適応社会教育ユニット）

② ひまわり高頻度観測について：気象衛星センター

関係者

自由討論(19:05～19:30)

連絡先：藤谷徳之助（国立環境研究所地球環境研究センター
内地球温暖化観測推進事務局）
E-mail:fujitani.tokunosuke@nies.go.jp

統合的陸域圏研究連絡会

日時：2013年11月19日（火）（大会第1日）セッション終了後2時間程度

場所：仙台国際センター（小会議室6，3階）

テーマ：「大気－陸域相互作用に関連したモデル相互比較実験の動向」

内容：温室効果ガス排出による将来の地球環境変動の予測において、大気－陸域相互作用を含む陸域モデルの不確実性の低減が重要な課題とされています。近年は、多くの種類の陸域モデルが存在しており、これらモデルの相互比較実験が国内外で盛んに行われています。モデル相互比較実験によって、モデル予測の不確実性の定量化、不確実性の要因となるプロセスの特定、今後必要な研究項目の抽出などが期待され、この結果は広い研究コミュニティに影響を与えることとなります。モデル比較実験から有用な知見を得るためには、各モデルの複雑さ、モデル出力データの膨大さなどによる解析の難しさを乗り越える必要があります。各研究者は、それら困難を乗り越えた上で、重要な結論の導出を目指しています。今回は、大気－陸域相互作用に関連したモデル比較実験に関して、大陸スケールから全球スケールの実験に関する4件の講演を実施します。モデル比較実験を通して得た大気－陸域相互作用に関する知見、世界中の様々な最先端モデルの現状、今後の研究の方向性などに関して講演を頂き、参加者間での活発な議論を通して、知見の共有や今後の研究の方向付けなどができればと考えております。

大気－陸域相互作用が気候システムに与える影響に関して理解を深め、活発な議論を通して、我が国の大気－陸域相互作用を扱う研究者の交流促進と分野全体の研究の発展を目指すことが本連絡会の趣旨です。大気－陸域相互作用の不確実性の低減の必要性が指摘される中、どのような方向性を目指すべきか忌憚りの無い議論を行いたいと考えておりますので、興味をお持ちの皆様のご参加をお待ちしております。

仮プログラム：

- 1) 河宮未知生（JAMSTEC）
「CMIP5概要：特に陸域に関連する部分に注目して」
- 2) 眞崎良光（環境研）
「気候変動影響評価モデルの相互比較：ISI-MIPの紹介」
- 3) 斉藤和之（JAMSTEC）
「北極圏の陸域モデル相互比較：GT-MIPの紹介」
- 4) 市井和仁（福島大）
「アジアにおける陸域生態系モデル比較実験－AsiaMIP」

総合討論

世話人：市井和仁（福島大）、大石龍太（極地研、東大）、大谷義一（森林総研）、近藤雅征（福島大）、佐藤 永（名大）、立入 郁（JAMSTEC）、奈佐原顕郎（筑波大）
問い合わせ先：伊藤昭彦（環境研）
E-mail：itoh@nies.go.jp

極域・寒冷域研究連絡会

日時：2013年11月19日（火）（大会第1日）セッション終了後（17:15～2時間程度）

場所：仙台国際センター（小会議室1，1階）

テーマ：「北極海の雲・降水の観測－新型レーダーによる展望」

趣旨：雲は放射を介して気象や気候に影響していますが、雲の性質によってその影響の仕方が変わってきます。雲の様々な特徴は水循環を表す指標として大いに価値があり、レーダーはそれらを観測するための欠かせない測器です。北極域においては極温暖化増幅に関連して、現場観測による雲・降水システムの役割の解明が必要であり、日本独自の雲／降水レーダー観測が世界的に注目され始めてきています。例えば、極地研究所が拠点を構えてきたノルウェーのスピッツベルゲン島にあるニーオルスンでは、GRENE 事業の基盤整備の一環として今年（2013年秋）から新たに雲レーダーが設置されます。ニーオルスンは国際的な観測拠点にもなっているため、他国の観測機器との同期観測や長期間の雲のモニタリングが可能です。また、JAMSTEC が運用している海洋地球研究船「みらい」搭載の降水ドップラーレーダーは、来年度に新システムへ更新される予定です。新レーダーが持つ高次機能によって、海氷減少域での雲・降水システムの変化を世界に先駆けて捉え、当該分野を国際的にリードすることが期待されます。

今回はこの2つのレーダーを主導している方々から、これまでの観測や新しいレーダーの仕様・実力についてお話ししていただきます。今後どちらの観測へも参加が可能ですから、この連絡会を機に多くの方々から北極の観測や研究に関わっていただけるよう期待しています。

話題：

- ニーオルスンにおける雲レーダー新設
- 1 「ニーオルスンにおけるこれまでの雲観測」
塩原匡貴（極地研究所）
 - 2 「ミリ波雲レーダ FALCON-A の性能と観測例」
鷹野敏明（千葉大学）
 - 3 「雲粒子ゾンデによる検証」
小林 拓（山梨大学）

観測船「みらい」のドップラーレーダーの更新

- 4 「北極海での降水システムの観測の重要性」
猪上 淳（極地研究所／JAMSTEC）
- 5 「新システムの仕様」
勝俣昌己（JAMSTEC）

連絡先：平沢尚彦（極地研究所，hira.n@nipr.ac.jp）

学会員の皆様へ　－電子予稿集について－

講演企画委員会　三上正男

昨年の 2012 年秋季大会では、学会として初めての試みとして、電子予稿集の配布を試行いたしました。その結果、多くの学会員の皆様に PDF 化された予稿集のダウンロードを利用して頂く事が出来ました。また、電子版の配布と同時に実施したアンケートにも、多くの会員に協力頂く事が出来ました。改めて、学会員の皆様にお礼申し上げます。

アンケートでは、従来の紙媒体よりも PDF 電子媒体を希望される会員が圧倒的に多い事が分かりました。配布価格を現在の冊子版と同じにした場合、413 回答中 83%の方が電子予稿集を選択し、冊子版と電子版の同時購入を合わせると 92%の会員が電子予稿集を希望されているという結果となっております。

この結果を踏まえ、講演企画委員会では、なるべく近い時

期に電子予稿集のサービスを開始すべきだという結論を得ました。しかし、今後どのような配布形態にすべきか検討した結果、電子認証システムを踏まえた学会の電子情報サービスの一環としてシステムを組む必要がある、との判断になりました。

そのためには、電子情報委員会など関係する委員会とも協同し、学会員への電子情報サービスのシステム構築を図る必要があります。学会員の皆様には、今しばらくお待ち頂く事になり、誠に申し訳なく思いますが、講演企画委員会としても、学会員へのサービス向上を目指した学会の体制強化について、引き続き取り組みを進めてまいりますので、皆様のご理解とご支援をどうかよろしくお願いいたします。

2014 年度春季大会の予告

2014 年度春季大会は、2014 年 5 月 21 日（水）～24 日（土）に横浜市で開催される予定です。大会告示は「天気」12 月号に掲載予定です。なお、春季大会の講演申し込み締め切りは 2014 年 2 月頃となる予定です。